

---

# IS 銀の姫とサーヴァント

黒翼

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS 銀の姫とサーヴァント

### 【Nコード】

N2508Z

### 【作者名】

黒翼

### 【あらすじ】

銀の姫は幼き頃の白き騎士に救われた。

だが、無常にも別れが訪れてしまった。

そして、かつてとは変わり果てた世界で再開する。

設定が甘かったり、チートだったりします。

そして、サーヴァントたちはFateとは違う性格だったりします。それらが嫌な方はバックで。

## プロローグ（前書き）

また始めてしまった……。。

## プロローグ

それはずっと昔のことだった。

「一緒に遊ぼうよ！」

「え？」

私は元々髪の色は違い、ブラウンだった。

しかし、あるとき突然髪の色が変色し、銀髪になってしまった。

その所為か、一緒に遊んでいた子達が奇妙がって私から離れていった。

だから、私は一人でいた。

そんな私に声を掛けてくれたのが彼だった。

「君も一緒に遊ぼうよ！」

「え、でも……」

「遊ぼう、ね？」

そんな私に明るい笑顔で話しかけてくれた。

私は嬉しかった。

「う、うん！」

一人だった私に、寂しかった私に声を掛けてくれた、彼が好きだった。

でも、私の両親は、あまりにも過保護だった。

幼稚園でこれだ、小学校ではもっと酷いかもしれない。

そういう考えを持ってしまったいたが故に、私と海外に移住することになった。

実家のあるドイツに行くことになってしまったのだ。

「一君……」

「ウリアちゃん、また会おうね！」

「う、うん、また……。私のこと、忘れないでね……？」

「もちろん！ 絶対に忘れない！」

「またね、一君。お姉さんにも言っておいてね」

「うん！」

これが、私と彼の別れだった。

『世界で唯一のIS操縦者・織斑一夏』

実家の城（誤字在らず）でテレビを見ていて、私『ウリアスフィー  
ル・フォン・アインツベルン』は呆然とした。  
祖父の命令でIS学園に行くことが決まっていた私は運命を感じた。  
彼の姉は一年ほどドイツ軍に来ていたため、再開したときは驚かれ  
た。

彼女は私の立場に驚いた。

私は、ドイツのみならず、様々な国に大きな権力を持つアインツ  
ベルン家の次期当主で、アインツベルンの企業の企業代表操縦者に  
なっていた。

元々、アインツベルンは貴族だった。

それ以外に、錬金術が使える。

私も使えるが、流石に治癒まではすることができない。

「一君、覚えているかな……」

『彼がウリアスフィルの言っていた人ですか』

「うん。私の恩人で、私の初恋の相手。今もそれは続いているんだけどね」

『写真で見る感じはいい男だな』

「幼稚園のころは凄く優しくて、明るい人だったよ」

『それは今でも変わらぬといいがな』

「きつと一君は今でもいい人だよ」

『そうであると願いますよ』

「うん。早く会いたいな……」

私は、早くIS学園に入学したい、早く一君に会いたい、そういつた欲求が生まれてきた。

## 再開

「全員揃ってますねー。それじゃあS H Rを始めますよー」

『子供が無理して大人の服を着ました』的な不自然さを持っている。

「それでは皆さん、一年間よろしくお願いしますね」

「……………」

誰も答えません。

原因は、ここにいる唯一の男性で、私の初恋の相手の織斑一夏。

唯一の男性であるが故に、クラスの視線は全て彼に向けられている。私も見ているんですけどね、だって一君とっても格好よくなってるんだもの。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えっと、出席番号順で」

あ、私ですね。

「ウリアスフィール・フォン・アインツベルンです。よろしくお願ひします」

私に気づいてくれるかな？

一君は今この空気に飲まれちゃってるから気づかないかな？  
後で話しかければいいか



S i d e 一夏

キツイ、これは想像以上にキツイ！  
男が俺だけってこれだけ視線を集めるものだな。

「……くん。 織斑一夏君っ」

「は、はいっ!?!」

いきなり大声で名前を呼ばれたので思わず声が裏返ってしまった。  
案の定、くすくすと笑い声が聞こえてきた。

「あっ、あの、お、大声出しちゃってごめんなさい。 お、怒ってる？ 怒ってるかな？ ゴメンね、ゴメンね！ でもね、あのね、自己紹介『あ』から始まって今『お』の織斑君なんだよね。 だからね、ご、ゴメンね？ 自己紹介してくれるかな？ だ、駄目かな？」

山田先生はぺこぺここと頭を下げる。  
この人、本当に先生なのだろうか？

「いや、あの、そんなに謝らなくても……っていつか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「ほ、本当ですか？ 本当ですね？ や、約束ですよ。 絶対ですよ！」

俺の手をとり詰め寄る先生。

凄い注目されるんですけど……。

うわ、すっげー視線。

「えー……えっと、織斑一夏です。 よろしくお願ひします」

『もつと喋ってよ』と言う空気が流れている。

だが、話すことが何も無い。

……しばらく考えたが何も無い。

助けを求めて幼馴染の箒を見るが、目をそらされた。

あ、あれ？

あの子、もしかして……。

いや、まさかな。

つと自己紹介の最中だったな。

「……以上です」

女子数名がずっとこけるが、俺にとってはどうでもいい。

彼女があの子なのが気になって仕方が無い。

む！ 殺気！

パシッ！

この攻撃の鋭さ、間違いない！

「ほう、防ぐか」

黒スーツにタイトスカート、すらりとした長身、狼を思わせる鋭い  
つり目。

間違いない。

俺の実姉なのだが、職業不詳で月一、二回しか家に帰ってこないの  
だ。

だけどなんでここに？

「……やっぱり千冬姉だったか」

パシッ！

「織斑先生と呼べ。馬鹿者」

もう一度出席簿が振り下ろされるが、それをも防ぐ。  
俺だって鍛えているんだ、それがこんなところで役立つとは。

「あ、織斑先生、もう会議は終わられたのですか？」

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押し付けてすまなかつたな」

俺は聞いた事のない優しい声だ。

「い、いえっ。副担任としてこれくらいはしないと……」

山田先生は若干熱っぽくなった。  
そっちの気があるわけではないよな？

「諸君、私が織斑千冬だ。これから一年間で君達を使い物にするのが私の仕事だ。私の言う事はよく聞き、よく理解しろ。理解出来ない者は出来るまで指導してやる。私の仕事は弱冠15歳を16歳までに鍛え抜くことだ。逆らっても良いが、私の言う事は聞け、いいな」

なんとという暴力発言。

教師有るまじき発言だと思っぞ、我が実姉織斑千冬よ。

……何のキャラだ、コレ？

「キヤーーーーーー！ 千冬様、本物の千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園から来たんです！ 北九州から！」

「あの千冬様にご指導いただけると、嬉しいです！」

「私、お姉様の為なら死ねます！」

キヤアキヤア騒ぐ女子達を、千冬姉はうつとうしそうな顔で見ている。

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者共が集まるものだ。感心させられる。それとも何か？ 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか？」

人気は買えないんだから、もうちょっと優しくしようぜ？

「きゃああああつ！ お姉様！ もっと叱って！ 罵って！」

「でも時には優しくして！」

「そしてつけあがらないように躡をして〜！」

このクラスは変態さんが多いのか？

ノーマルだよな？ ノーマルもいるといっけてくれ！

「で？ おまえは挨拶も満足にできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

パシッ！

本日3度目。

俺、止めてなかったらもう脳細胞が一万五千個死んでるぞ？

「織斑先生と呼べ」

「了解です、織斑先生」

俺と千冬姉が姉弟なのがばれた。

「え……？ 織斑君って、あの千冬様の弟……？」

「それじゃ世界で男で『IS』が使えるって言うのもそれが関係して……」

「ああっ、いいなあっ。代わってほしいなあっ」

最後のは放っておこう。

「さあ、SHRは終わりだ。諸君らにはこれからの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染みこませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

なんという鬼教官だ。

「席に着け、馬鹿者」

馬鹿で結構。

Side～一夏～out

Side～ウリア～

一夏、強くなってるみたい。

あの千冬さんの攻撃をああも防ぐなんて。

>ますます惚れましたか？<

>うん。写真で見るとよりもずっと格好いいしね<

>その恋が実るといいな<

>うん。覚えているかな？<

あ、彼らはアインツベルンが創った私の専用機『サーヴァント』の人格たち。

アインツベルンが過去に召喚した英霊たちらしい。

神話に出てきた英霊たちの力を貸してもらうことができるのが、私のISの強みなんだ。

キーンコーンカーンコーン。

あ、一時間目が終わった。

一君はダウンしていた。

大丈夫かな？

>主よ、話しかけなくてもいいのか？<

>あ、そうだった<

私は席を立ち、一君の席に行く。

「ちょっといいかな？」

私以外にもう一人、一君に話しかけようとしていた子がいたけど、私は確かめずにはいられない。

「はい？ ……！（ガタツ！）」

一君は私を見ると驚いて席を立った。  
周りは何事かと見てるけど、気にしない。

「覚えてる……かな？」

「ウリア、なのか……？」

「うん。久しぶりだね、一君」

「本当に、ウリア……なんだな？」

「そうだよ。幼稚園のころに別れた、ウリアスフィール・フォン・アインツベルンだよ」

「久しぶり、ウリア。俺、ずっと覚えていたぞ。ウリアと別れてから十年間、ずっと」

「うん……私もずっと忘れなかった……」

よかった、一君が私のことを覚えていてくれて……。  
涙が出てきたよ。

「お、おい、どうした？」

「嬉しくて涙が……」

「そんなに嬉しいのか？ 俺も嬉しいけど……」

だって私の好きな人なんだもん！

覚えてもらえて嬉しくないわけないでしょ！

>おめでとつございます、ウリアスフィール<

>まだ早いぞ、アルトリアよ。それはウリアの恋が実ってから言うべき台詞だとは思わないかね？<

>ほう、わかっているではないか<

>イスカンドル、私は鈍感であつたが、それは過去の話だぞ。それに、流石にそれくらいは俺でもわかる< 　　そ

>一番新しい英霊が言うのではないか<

>無駄な言い争いをするな。 　　我らは主に仕えるだけであらう<

>間違っているぞ、デイルムツドよ。 　　余は仕えてはおらぬ。この契約は余たちの気分次第だ<

>イスカンドルの言うとおりだ。 　　現にギルガメッシュは現界しているが、力を貸すことは滅多にない<

>そついえばそつだつたなく<



このISに宿る英霊たちの中で最も強い力を持つギルガメツシユは、滅多なことがない（ていうか、二回くらいしか使ったことが無い）と力を貸してくれないから困る。

『オレ私の宝物をそう簡単に使おうとは片腹痛い』とか言うから、ギルガメツシユはほとんど使えず仕舞い。

人類最古の英雄王はいつになったら私にちゃんと力を貸してくれるのだろうか？

「これからもよろしくね、一君」

「ああ、よろしく。あと、一夏でいいぞ」

「今はまだ一君のほうがいいからこのまま」

「そうか」

キーンコーンカーンコーン。

「時間みたいだから、また次の時間にね」

「おう」

私と一君の繋がりが切れて無くてよかった。

再開（後書き）

「出した英霊たちは、なんとなくです。

後、原作読んでないから英霊たちの口調がわからない！」

「そんなので大丈夫なんでしょうか？」

「問題ないと信じている！」

「こんな駄作者ですが、応援してあげてくださいね」

「ウリアあ!？」

## 設定（前書き）

一応投稿します。  
が、設定が甘いです。

## 設定

### 【名前】

ウリアスフィール・フォン・アインツベルン

### 【見た目】

Fateのアイリとイリヤを足して二で割ったような感じ。  
元々はブラウンの髪に赤い目だが、なぜか急に銀（白？）髪に変わった。

### 【設定】

幼稚園時代は日本にいたが、突然の髪色変化により起きた周囲の反応と、あまりにも過保護すぎた両親の所為でドイツに移住した。  
アインツベルン家の次期当主で、アインツベルンの持つ企業の企業代表でもある。  
アインツベルンの秘奥である錬金術を覚えているが、治療術はまだできない。  
一夏のことはずっと好きで、一途である。

### 【専用機名】

サーヴァント

### 【設定】

アインツベルンが創り上げたIS。  
アインツベルンが呼び出した英雄たちの霊『英霊』たちが宿り、その英霊の気分次第で力を貸すという、変わった性質を持つ変わったIS。

元々のカラーは雪のような白で、英霊の使用した武器『宝具』も使えるが、真の力は使えない。

『宝具』の真の力を使うのは簡単で、英霊とISを共有するのと（共有時はISの格好が変化する）。ただし、その英霊が拒めば使えない。しかし、その中にもいろいろと例外が存在したりする。

【織斑一夏について】

一夏の戦闘能力は高く、剣道にて、箒では相手にならないほどに強い。

## 宣戦布告

(一君、どうしたのでしょうか?)

二時間目。

一君が挙動不審でした。

>内容がわからないのでは?<

(あ、それも)

>恐らくESの勉強をし始めたのは長くても一ヶ月前。十分額ける<

>何かしらのアクシデントがあるかもしれない<

(それだね。何かの手違いがあって捨ててしまったのかもかもしれませんし)

>まあ、今は見届けるべきであろう<

(うん)

私は一夏を見守ることにした。

「先生!」

「はい、織斑君!」

「ほとんど全部わかりません」

え？

「え……。ぜ、全部ですか……？」

一君、本当に何してたんですか？

「え、えつと……織斑君以外で、今の段階でわからないっていう人はどれくらいいますか？」

誰も手を上げない。

「……織斑、入学前の参考書は読んだか？」

「古い電話帳と間違えて捨てました」

パンツ！

今度は防がない一君。

自分が悪いのは自覚しているようだ。

それにしても、本当に捨ててしまったとは……。

「必読と書いてあったらだろつが馬鹿者。あとで再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちょっと……」

「やねと言っている」

「……はい。 やります」

よし、教えよう。

私は一君のためならなんでもするつもりだし、そもそも他の子なんかに一君を渡してたまるものですか。

「一君、大丈夫？」

「大丈夫じゃない。 さっぱりわかんねえ」

「それは仕方ないよ。 だってここに来る子はちゃんと勉強してきてるんだし、ISに全く関係の無かったんだから、それはこれから挽回しよ？ 私も手伝うから、ね？」

あれ？

一君に目を逸らされちゃいました。

「あ、ああ。 よろしく頼むよ」

「……ちょっと」「ちょっとよろしくって？」「……」

「へ？」

「はい？」



声を掛けてきたのは黒髪ポニーテールの子と、金髪ロールの子。全く、一君と私の時間を邪魔しないでください。

「訊いてます？ お返事は？」

「あ、ああ。 訊いているけど………どっいつ用件だ？」

「まあ！ なんですよ、そのお返事。 わたくしに話しかけられるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあるんじゃないかしら？」

「悪いな。 俺、君が誰か知らないし」

「私もです」

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。 下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。 よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

「そこまで無知でしたか……」。

「周りの子供達がずっと聞いてますよ。」

「一君、代表候補生と言うのは国家代表IS操縦者の候補生のことだよ。 単語からもわかるよ」

「そう！　つまりエリートなのですわ！」

一君に指を指さないでください。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……馬鹿にしていますの？」

あなたが幸運って言ったんじゃないですか。  
私と一君が再会できたことのほうが幸運です。

「大体、あなたISについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。唯一男でISを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわ」

「俺に期待されても困るんだが」

「一君のことを知らない人が評価をしないでください。そんな下らない価値観を持っているから世界が歪むんです」

「なんですって？」

「貴女が偶々学年主席で、イギリスの代表候補生なだけで一君を下に見ないでください。貴女よりも一君のほうがよっぽどか世間に

誇れます」

「貴女、私を侮辱するんですの？」

「貴女が先に一君を侮辱したんじゃないですか。私は一君を知らないのに侮辱する貴女が嫌いです。これなら入試を受けておくべきでした……」

「貴女、今なんと？」

「入試を受けておけばよかったといっているんです。私が主席であれば、貴女を罵ってもいいですよ？ 貴女が一君を罵ったようにね」

「貴女、入試を受けなかったんですの!？」

「はい。御爺様曰く、やるだけ無駄と」

次期当主たるもの、代表候補生に負けてはいけません。

「あ、そういえば一君、入試はどうでした？」

「あーあれか？ ISを動かす奴だろ？」

「そうですよ」

「あれ、俺も倒したぞ」

「へえ、流石ですね」

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと……？」

「いや、知らないけどそうだろ。俺も一応倒したし」

「自信過剰ですね。滑稽です」

「一応ってどういふことですか！？」

キーンコーンカーンコーン。

「っ……！ またあとで来ますわ！ よくって！？」

よくありません。

あ、そういえば黒髪ポニーテールはどうしたのでしょうか？  
まあ、気にしなくても大丈夫でしょう。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目とは違い山田先生ではなく織斑先生の授業のようです。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

織斑先生が思い出したように言いました。

私は遠慮しておきましょう。

「クラス代表とはそのままの意味だ。 対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長だな。 ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。 今の時点でたいした差はないが、競争は向上心を生む。 一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

「はいっ。 織斑君を推薦します！」

「私もそれがいいと思います！」

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 自薦他薦は問わんぞ」

「お、俺!？」

私も一君で賛成です。

私が出るわけには行きませんしね。

一君がクラス代表になれば、鍛えると言って一緒に入れますし。

「織斑。 席に着け、邪魔だ。 さて、他にいないのか？ いないなら締め切るぞ」

「ちよっ、ちよっと待った！ 俺はそんなのやらない」

「自薦他薦は問わないといった。 他薦されたものに拒否権などない。 選ばれた以上は覚悟をしる」

「い、いやでも」

パンツ！

「待ってください！ 納得がいきませんわ！」

……また貴女ですか。

「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんていい恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルセツトにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」

……。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。 それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！ わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであって、サ―カスをする気は毛頭ございませんわ！」

……。

「いいですか！？ クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

貴女がトップ、ね……。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけない自体、わたくしにとって耐え難い苦痛で」

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。 世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「ただの古いだけの国に何があるんですか？」

「一君が怒るのはわかります。ですが、私も我慢なりません。」

「あつ、あつ、あなたがた！ わたくしの祖国を侮辱しますの!？」

「先に日本を侮辱したのは貴女ですよ。私はこの国が好きなんです。ましてや、一君の侮辱をもする貴女は気に入らない」

「あ、あなた、一度までならず二度までも……!」

「そもそも、日本で暮らすのが苦痛ならば国に帰ればいいではないですか。誰も貴女を止めませんよ?」

「け、決闘ですわ!」

「いいでしょう。貴女のその自信、粉々にしてあげます」

>ウリアスフィールが怒っています……<

>ほう、面白そうだな<

>ギルガメツシュ!??<

>ここまで切れたのは中々無いではないか。あの雑種がどのようにしてウリアにやられるか、見物ではないか<

>あそこまで怒っているのは初めてではあるが……<

>あのウリアが怒っているのだぞ？ これ以上ない余興ではないか  
英霊たちが何か言ってますね。

「さて、ハンデはどれほど付けましょうか？」

「貴女、私をどれだけ下に見れば……！」

「オルコット、悪いことは言わん。ハンデを付けてもらえ。お前では確実に負けるぞ。あいつはあのアインツベルンの次期当主だぞ」

「な!？」

アインツベルンは何かしらで秀でていないとならない。  
私は頑張っであらゆることを覚えましたがからね。  
御爺様曰く、歴代最強になれるとのこと。

「先生、勝手にばらさないでくださいよ。まあ、いいです。この際言っておきましょう。アインツベルン家次期当主兼企業代表のウリアスフィール・フォン・アインツベルンです。以後、お見知りおきを」

「では、勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。アインツベルンとオルコット、その後、その勝者と織斑の試合だ。それぞれ準備をしておくように」

「俺もなのか!？」

「アインツベルンはそもそも立候補も推薦もされていない。これ



がクラス代表を決めるものだ と忘れるな。 では、授業を始める「

( どうやってあの子を潰しましょうか……、強すぎる宝具ではあつけないですし…… )

> では、私ならどうだ？ <

( シロウ？ あ、そうですね。 あなたの宝具ならじわじわとやれます )

さて、試合はかなりどうでもいいので、一君を助けましょう。

宣戦布告（後書き）

「ウリアは一夏のことになると人格が変わります」

「一君を侮辱するなら、それが誰であるつと許しません……」

「わぁー黒いオーラが見えるよー」

## 同居

S i d e 一 夏

放課後、俺は机の上でぐったりとしていた。

ウリアに教えてもらおうとしたけど、用があるみたいで駄目だったにしても、ここにウリアがいるなんて未だに信じられないな。

昔も可愛かったけど、もっと可愛くなってたし……って何考えてるんだ、俺は!?

「ああ、織斑君。　まだ教室にいたんですね。　よかったです」

「は、はい？」

いかんいかん。

あと少し遅かったらもっと酷く動揺しただろう。

「えつとですね、寮の部屋割りが決まりました」

そう言って部屋番号の書かれた紙とキーを渡す山田先生。

「俺の部屋って決まってるじゃないじゃんかったですか？　前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらって話でしたけど」

「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処置として部屋割りを無理やり変更したらしいです。　政府特例もあって、とにかく寮に入れることを最優先にしてみました。　一ヶ月もすれば別の部屋が用意できるので、しばらく我慢してください」

「わかりました。でも、一回家に帰らないと荷物を準備できないので、もう帰っていいですか？」

「あ、いえ、荷物なら」

「私が手配しておいてやった。ありがたく思え」

あー千冬姉か。

どうせ生活必需品しか持って来てないだろうな。  
やっぱ一回帰らないと駄目だな。

「生活必需品と、一応あれも持ってきておいたぞ」

「本当か？ 千冬姉！」

パシッ！

「織斑先生と呼べ」

危ない危ない。

危うく喰らうところだった。

「ありがとうございます。これで帰らなくて済む……」

あれとは、まあ木刀と真剣とかなんだが、俺が鍛えるときに使っているものだ。

あれがないとやり辛いんだよな。

「じゃあ、時間を見て部屋に行ってくださいね。夕食は六時から七時、寮の一年生用食堂でとってください。ちなみに各部屋には

シャワーもありますけど、大浴場もあります。学年ごとに使える時間が違いますけど……えっと織斑君達は今のところ使えません」

「え、なんでですか？」

俺、風呂大好きなんだが……。

「あほかお前は。まさか同年代の女子と一緒に風呂に入りたいのか？」

「あー……」

なるほど、そういえば俺しか男いないんだった。

「おっ、織斑君っ、女子とお風呂は入りたいんですか！？ だっ、ダメですよ！」

「い、いや、入りたくないです」

ウリアとだったら……って、何考えてるんだよ、俺は！

「ええっ？ 女の子に興味が無いんですか！？ そ、それはそれで問題のような……」

「ようじゃなくて普通に問題です。それと、俺はノーマルです。同性愛者ではありません」

俺はずっとウリアが好きなんだよ。

それもあつたから、ずっと覚えてくれたんだ。

「えっと、それじゃ私達は会議があるので、これで。織斑君達、ちゃんと寮に帰るんですよ。道草くっちゃだめですよ」

確か、校舎から寮まで50メートルくらいしかなかったはずだ。どうやれば道草をくえるんだ？

「さて、部屋に行こう……」

この女子たちの針の筵から開放されるなら、まだ部屋で他の女子一人のほうはまだマシだ、多分。

「1025……ここだな」

俺は鍵を差し込む。

あれ、開いてる？

部屋に入ると大きめのベッドが二つ並んでおり、まるでホテルの個室みたいだった。

とりあえず荷物を床に置いて、ベッドにダイブする。すっげえもふもふしてる。

「誰かいるんですか？」

奥のほうから声が聞こえた。

「あ、同室になった人ですか。こんな格好ですみません。私は」

「　　ウリア」

シャワー室から出てきたのは十年ぶりに再会した白銀の美少女、ウリアだった。

そのウリアの格好は、バスタオルを一枚巻いただけであった。白銀の髪に白い肌が映え、とても綺麗に見えた。

「…………え？」

S i d e ～ 一 夏 ～ o u t

S i d e ～ ウ リ ア ～

「…………え？」

私がシャワーを浴びて出ると、一君がいた。

「い、い、一君…………？」

「お、おう」

私の今の格好を思い出す。

シャワーを浴びた分で、バスタオルを一枚巻いただけ。

「きゃっ！」

「わ、悪い！」

咄嗟に手で胸元を隠してうずくまる。

「君は後ろを向いてくれた。」

「な、何で一君がこの部屋に……？」

「な、なんかここが俺の部屋みたいだな」

「そ、そうなの……？」

「こ、これがその紙」

「君が顔を背けたまま紙を見せてくれる。紙には1025と書いてあった。」

「……本当みたい……」

「お、俺はどうすればいい？」

「そ、そのままお願い！」

「わ、わかった！」

私は急いでシャワー室に入り、手早く着替える。

「み、見られちゃった……。まだ心臓バクバクだよ……」



いくら好きな人と言えど、全く予想してなかったのでビックリしてしまっただ。

「ふう……よしっ！」

私は深呼吸をしてからシャワー室を出る。

「もういいよ」

「お、おう」

「え、えっと、その……」

何を話したらいいのかな……。

「久しぶり、ウリア」

「あ、うん、久しぶり。十年ぶりだね」

「今まで何してたんだ？」

「ドイツの方の学校に行ってたんだ。実家を継ぐためにもいろいろやってたよ」

「へえ、そうなんだ」

「一君は？」

「俺はひたすらに鍛えていたな」

「みたいだね。千冬さんの攻撃を何度も防いでいたからわかったよ」

普通避けるのも防ぐのも無理だと思うんだよね。

「そういえば一君、あの黒髪ポニーテールの女の子と知り合い？」

「もしかして箒のことか？」

「箒？」

「篠ノ之箒って言って、小学校のときに知り合ったんだ」

「篠ノ之？ 篠ノ之ってあの篠ノ之？」

「そうだけ。箒は篠ノ之束さんの妹なんだ」

「あの人の妹ですか」

「知ってるのか？」

「なんとか実家に来たことがあるんです」

「マジかよ。あの人が今どこにいるかわからないんだよね」

ISを開発した篠ノ之束博士は現在行方不明なんですけど、なぜか実家に来るんですよね。

ふと気づいたら侵入されたこともありますし。

「あ、あの……一君」

「ん？ なんだ？」

「一君って、付き合ってる人が、好きな人っていますか？」

「ずっと気になっていました。」

「ぶっ！ い、いきなり何を言うんだ!？」

「気になったんです！ 十年の間にそういう子がいてもおかしくないですし……」

「……付き合ってる子はいないけど、好きな子ならいるよ」

「！ そう、ですか……」

「やっぱりいたんですか……。  
ちよつと残念です……。  
でも、その分頑張らないと！」

「きゃっ！ い、一君？」

「一君に抱き寄せられました。  
な、なななんで!？」

「俺が好きなのはお前だよ、ウリア」

「……え？ 今、なんて……?」

「俺が好きなのはお前なんだ。　　ウリアと別れてからの十年間、ずっとお前のことが好きだった」

一君は私のことが、好き？  
十年前からずっと？

「お、おい、どうしたんだ？　もしかして、嫌だったか？　そうだよな、好きでもない男に抱き寄せられたら泣きたくもなるよな……」

私の目からは自然と涙が溢れてきていた。

「ち、違っよ、一君。　嬉しいんだよ」

「う、嬉しい？」

「私も、ずっと一君のことが好きだったんだ。　そしたら一君が……」

「そうか……、よかったあ。　嫌われたんじゃないかって思って冷や冷やしたぜ」

「でも、私でいいの？　十年ぶりなんだよ？」

「当たり前だ。　そういうウリアだって十年ぶりじゃないか。　本当に俺なんかでいいのか？」

「一君は私の恩人なんだよ？　一人ぼっちだった私を救ってくれたんだよ？　忘れたくても忘れられないよ」

「そうか。　あの時はそんなつもりなかったんだけどな」

「一君にそんな気がなくても、私にとってはとっても嬉しかったよ。となんだよ。だから今までずっと好きだったんだよ」

「そうだったのか。ありがとう、俺なんかをずっと好きでいてくれて。そして、これからよろしくな、ウリア」

「うん、よろしく。一君……いや、一夏」

「一夏って呼ぶときは思いが伝わったときって決めてたんだ。

「ねえ、一夏」

「どっしむう！」

私は一夏にキスをする。

「私のファーストキスだよ」

「俺もだ」

>>>おめでとう(じざいます)、ウリア(スフィール)<<<<

英霊たちも祝ってくれた。

今日はいい日だよ。

Side～ウリア～out



同居（後書き）

「一夏とウリア、あっさりとくっつけちゃいました」

「一夏と恋人、えへへ……」

「若干ウリアが壊れましたね」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2508z/>

---

IS 銀の姫とサーヴァント

2011年12月11日19時38分発行